

皆さん、こんにちは

慶太伝の執筆をさせていただいた根本忠一です。

青木村の皆様にお会いできるこの日を待ち望んでいました。

青木村の皆さんのために、という思いで書いたのですが、今日の今日まであの本が皆さんに本当に受け入れていただいたのかとても不安でした。

今日こうして皆さんの顔を拝見できたことを嬉しく思います。

青木村とのご縁

北村村長は去年3月にリンゴジュース2本抱えて東京まで来ていただきました。「五島慶太の本当の素晴らしさは世にあまり知られていません。青木村の子どもたちの未来のためにも伝記を書いてください」と私に熱く語られました。あの情熱に心を打たれ、りんごジュースで簡単に引き受けてしまったことをあとで後悔しました。

りんごジュースはたしかに美味しかったけれど、まつたけにしておけばよかった、と心の中で思っていました。

でも、私に選択肢はありませんでした。こういう時は理屈じゃないんです。大きな力が働いているようでそれを受けざるを得ませんでした。この本が出来た時に自分の人生が変わるかもしれない、そう直感しました。まさかそのタイミングで突然の肩たたきに合うとは思っていませんでした。4月からは稼ぐ当てのない個人事業主です。

かつて岩下棟梁が生家が焼失した時まだ火が消えていない中で、村長と東急の但馬さんに「何とかならないか」と迫られ、「はいか YES しか答えはありませんでした」と言われましたが、それと同じです。

だいたい、なんで青木村に縁もゆかりもない自分に白羽の矢が立ったのか、皆さんもいぶかしく思ったのではないですか？私に決まった後に村役場では「なんで生産性本部の人が書くの？」と誰かが言ったとか、村の議会で「慶太伝はどれくらい進んでいるのか？」と質問があったとか、信頼ないんだなあと思いました。

青木村の人たちは冷たかったけれど、あの時、妻は言いました。「才能を見抜いてあなたに執筆を依頼してきた北村村長はえらい」普段厳しい妻ですが私ではなく村長を褒めていました。

実は正直、私も本業もあるので書ける自信はほとんどありませんでした。

村の仕事は単年度だから1年勝負、それで何が何でも書くとなると相当プレッシャーを受けることになる。最大の努力をしたとしても出来ないものは出来ない、でも、いい加減に書いてやめることはしたくないので、書けるところまで書いて終わる、と実は初めから決めていました。話の流れがちょうど本格的に実業界に移るタイミングだったので、あとでとってつけたように「立志編」としました。

一生分の事実をさらっと書くのではなく、青木村にいた少年期まででもいいから、読んで

良かったと思える深みのある文章を書きたい、そう思っていました。

執筆のプレッシャー

面白いですよ、私の本業はストレス、メンタルヘルスの研究。ストレスは悪いもので、あってはならないと誰もが決めつけている。しかし現実にはプレッシャーがあつてこそ仕事ができる。人からのプレッシャーはきつけれど、自分が自分にかかるプレッシャーは励みになる。

だから子どもに、勉強しろというから子どもは勉強しない。子どもに夢を見られる環境を作れば自然と勉強することに気づいていない。親のコンプレックスで良い学校に行かせようとしてもものにならない。そんなことするなら親自身が勉強する楽しさを見せつけばいいのではと思います。

私も今回は勉強し過ぎて、あんな難しい言葉ばかり並んだ本になってしまいました。信毎のえらい方からは、「根本さん自身よくわかってなくて使ってんじゃないの？」と言われました。正直、ぎくっとしました、ばれたか、と。

青木村の子どもたちは頭が良いと聞かされていたので、中学3年生なら読めるだろうと高をくくっていました。東急の役員の但馬英俊さんは飯山のお生まれですが小学生の時に「信州の人脈」という本を、漢字を読み飛ばしながら読んで自分も五島慶太のつくった会社に入りたいと志を立てたそうです。私が妥協しなかった理由はここにありました。誰でも読める本ではなく、言葉の意味が分からなくても読んでみたくなる本を作ることだと思っていました。

一章書くごとに青木村の塩澤課長に送ると「今回も勢いがあります」と返事が来ました。それなのです。それがOKのサインと受け止めていました。「勢い」が大事、一気に読めることが重要なのです。

話は戻りますが、執筆を頼まれた時に、本を作るとなるとどのくらいの作業をするかを計算してみました。すると字数にして20万字。来春4月の五島慶太の日の出版を考えると12月までに原稿を書かなくてはならない。するとひと月3万字以上書かなくてはならない、それは無理。

いかに書かずに済むようになるかを考えたら、文字を大きくして写真をたくさん入れてもらうこと、そのために役場のご担当の塩澤さんと未来創造館の青木さんにたくさん注文を出しました。あまりに私が注文を付けるものだから、最後に一度だけ塩澤さんが怒ったのを覚えています。でも正直ほっとしました。あれで不満をため込んで本が出来たなら、今の人間関係は出来なかったと思います。

勢いあまって装丁にもいろいろ注文を出しました。最も苦勞したのは裏表紙に義民太鼓のバチを叩く姿、あれを薄く描く、あそこに出てくるのは子どもではダメで大人がいい。こ

のイメージがなかなか伝わりませんでした。中澤印刷の飯島さんからは「こんなに薄くちゃ何もわかりませんよ」と言われました。でも出来上がったらどう見ても保存会の宮入会長だとわかります。ご本人はさぞ嬉しかったようだと言っています。宮入会長、いらっしゃいますか？ 裏表紙でも本に自分の姿が出るなんて素晴らしいじゃないですか。青木村の皆さんと一緒に作ったというメッセージを込めたかったのです。

「強盗慶太」について

さてご縁があって、五島慶太翁の伝記を執筆することになりましたが、最初は私自身慶太翁のことは東急創業者くらいの知識しかありませんでした。東京でその名を知る人は「あの強盗慶太ね」と言うくらいで、その人たちも慶太翁を深く知っているわけではありません。それに私は東急の人間でも青木村の人間でもない。この執筆には義務もなければ見返りもない。だから逆に色のついていない五島慶太を書けることが強みだと思いました。

それにしても一度つけられた「強盗」のイメージは強烈ですね。地下鉄戦争の時に早川徳次とのやり取りの中でなかなか協力しなかった早川に業を煮やしそこで買収したことでその名がついたのですが、五島慶太は早川に対しその後も丁重に対応している。しかしマスコミは判官びいきで早川に同情した。それでついたあだ名だったのです。

五島慶太を欲望と権力の塊という視点でしか見られない。さもないことです。執筆中にこの悲しみに何度も触れました。慶太翁自身も買収したことで勝ち誇るようなことを言っていない。

伝記に書きましたが、慶太翁が浦里小学校時代に逆賊扱いされた足利尊氏について先生にこう質問しました。「ともあれ天下をとったのであるから、尊氏にもどこかよいところがあり、すぐれたところもあったのではなかろうか。尊氏のよいところ、すぐれたところもはなしてほしい」と語ったそうですが、そのエピソードとご本人がのちに「強盗慶太」と言われたことが重なっているように見えて自分の将来を暗示していたようにも思います。あとでご子孫の小林正博さんから、それもあって「家で五島慶太の話が出ることはなかった」とお聞きしたときは驚きました。とても話せなかったそうです。小林家の皆さんがそんな苦勞をしていたんだと。

「慶太伝」のミッションは、強盗慶太の汚名を晴らし、世に五島慶太の本当の姿を知らしめること、そう思ったら力が奮い立ちました。

運命を受け入れること、幸せを手にする事

実は私は皆さんがどう思われているかわかりませんが文章を書くのが苦手です。自分の文章に納得できず書くたびに自己嫌悪に駆られるのです。その刃（やいば）を自分に向けてひとつの文章で20回くらい推敲します。その諦めの悪さがあの文章なのです。そのぶん皆

さんが想像できないような疲労感を覚えます。でもそのくらい書き直すと何とか人並の文章が書ける。きっと皆さんにもできますよ。そんな私も以前、渡辺淳一先生からエッセイで審査員特別賞をいただいた時に文章が苦手という呪縛から少し解き離たれました。

自分には特別な才能がないのですが、苦勞はしても努力すれば何とか形にすることは出来るので、自分の力のレベルだとかうするしかないと諦めています。

今どきの風潮としてそうした「努力」の価値が霞んでしまっているように思います。

人はなるべく苦勞せずに成果を得るためにタイパやコスパを重視します。その成果のほとんどは自分のためです。自分のため、が悪いと言っているのではありません。本当の力は自分のためではなく、誰かのため、何かのために尽くすときにあらわれます。

“自分のために”と、“我が子のために”、どちらで力が出ると思いますか？と聞かれたら一目瞭然だと思います。

五島慶太は、傲岸不遜と言われていたけれど、その「自分のため」が見えないのです。

私はキャリアコンサルタントを指導する仕事をしていますが、一般的にそこでは人生の目標を持ちなさいと教えます。しかし私の知っている偉くなった人はみな自分が何になりたいと考えなかったことで共通しています。自分の行く場所を自分で決めていない。導かれるままそこに行っているのです。

どこかでたいへんな状況が起こったときに、これを任せられるのは彼しかいない、彼ならなんとかしてくれるだろうとそこに呼ばれる。決して本人は自分からそこに行っていない。あの慶太伝を読んだあるえらい方は「これ、私のことを書いているようだ」と言われました。

ある聖書（キリスト教の聖書）研究家は、山上の垂訓を読み解いて、「覚悟してはいけない」と言われました。未来は神の領域で人がそこに立ち入るのは傲慢だということです。なるほど五島慶太に覚悟が見えないのはそういうことか、と思いました。運命を受け入れそこでなすべきことをしている。

慶太伝にも書きましたが、日本生産性本部会長の小林喜光氏は

「宿命に耐え、運命と戯れ、使命に生きる」と言いました。

立派なこと言うなあ、と思って本に入れたのですが、あとで聞いてみたら焼鳥屋の壁に「宿命、運命、使命」とあったのでそれをこうまとめたそうです。内緒ですよ。

五島慶太が追い求めたもの① 五島慶太は努力の人

五島慶太は一言で言うと「努力の人」です。努力していれば大きな何かが出来る、それを疑わない上昇志向が彼の持ち味です。思い詰めた目的も達成感も彼の関心にはなかったと思います。

本人は子どもの頃「大臣になりたい」と思っていたのですが、それは目標ではなく、スタートだったと私は思います。何をするかなんて自分で限定していないのです。だから役人

にも限界を感じ辞めてしまった。

軍人に興味を示さなかったのもそれに近いものがあるように思います。軍人は目的がはっきりして自由が利かない。基本的には命令に従う。それは彼の生き方のスケールに合わなかったように思います。

大人になってからの慶太翁が心掛けたのは自己犠牲です。自分に課したその時々をの目的を成し遂げるために自分が犠牲になることをいとわずやり遂げる。周囲の人たちはその慶太翁に魅了され、彼を応援していきます。多くの伝記で、“傲岸不遜で目的のために手段を選ばない”という書き方をされていますがそれは間違いです。彼は自分のためではなく、社会のために何をすべきか、それをいつも考え、そこに強烈な「使命感」を持っていました。もし彼が自分だけの目的で生きていたならあれまで人は彼を応援してはいないでしょう。自己本位の人間は人に愛されません。人に愛されないと未来を拓く運に恵まれません。音楽プロデューサーのつくくさんはこんなことを語っています。

「天才的な才能があれば、正直、芸能界において性格とかはどうでもいいのかもしれませんが。作品づくりだけを考えたら、性格が悪かろうが遅刻をしようが、本来は関係ないはずなんです。でも現実問題として、芸能界でも成功するには才能以外の要素がとても大事です。特に長続きするためには、長くみんなに可愛がっていただくバランス力がとても大事です」

「成功のためには才能よりも場数と継続力が重要です。大事なのは『好き』という思い。『好き』は続けられます。『好き』を突き詰めれば『天才』に勝てる、僕はそう思います」

では、「好きを見つける」ためにどうしたらいいか、大事なのは好奇心を育てること、そのためにどうすればいいか、好奇心を発揮するには幅広い知識を持つこと、自然科学や歴史を知ること、そこから何かを感じ取るための音楽や美術、文学という芸術への造詣を深め、「美しさ」や「素晴らしさ」を感じ取る感性を身につけることだと思います。

このことについてヤンキースで活躍した松井秀喜さんは子どもたちにこんなことを言っています。

「野球を好きになってください。好きになれば辛い練習にも耐えられますから」

夫婦関係にも言えるかもしれませんね。好きになれば辛いことにも耐えられる、かもしれません(笑)

五島慶太が追い求めたもの② 五島慶太の生きがい

話は変わりますが、この7月に念願のスイスに行きました。首都ベルンにアインシュタインが相対性理論を発見した当時の家が保存されていました。そこのお土産物屋の青年が私に声をかけてきました。「私が日本語で一番好きなのは、“いきがい”だ」と。正直驚きました。生きがいという言葉が世界に広がっているのは知っていたのですが、まさかそれを直接聞けるとは思っていませんでした。その前に日本の労働用語で世界に広がった言葉を知って

いますか？「過労死」です。面目躍如です。

「生きがい」を世界に紹介したのは、エクトール・ガルシアというスペイン人です。彼の書いた「Ikigai」は43か国語に訳されたそうです。彼は生きがいの条件を、①自分の好きなこと、②自分の得意なこと、③人の役に立つこと、④それで自分の稼ぎになること、その中心に生きがいがあるのだと言いました。彼はヨーロッパでもワークとライフのバランスの取れた人などいない、と言いました。

本当の幸せはタイパやコスパで言うような効率よく何かを得ることではないのです。自分ができること、好きなことで人を幸せにすること、それを見つけられるように努力することが大事だと思います。ドイツ人と並び日本人は勤勉な国民だと言われていました。今のドイツ人もとても秩序を重んじ、そのかわりリーダーがいないと動けないと教えてくれた人がいました。日本もそれに近い。しかしそれがなぜなくなったかと言うとおそらく欧米式の効率主義や合理主義が入り込み過ぎ、なるべく苦勞しないで効率よくお金を稼げるほうに日本人の意識が傾斜したように思います。一言で言うと「墮落」したのです。

今の国の政策も短期成果を上げることに焦りすぎ、時間のかかる基礎研究や人材育成を軽視しているように見えます。だから国力を上げる基盤が伴わず、国際競争で勝てる自信がない。自信があるように見せているのは一部の政治家だけです。企業経営者はみずから自社の技術を磨き世界のどこにも負けない真似のできない独自性を磨くべきです。

この地に工場を作られた竹内製作所の竹内敏也社長は「私たちの存在意義は、住環境の維持・改善に必要不可欠な小型建設機械を全世界にお届けし、人々の幸福で豊かな暮らしに貢献することです」とホームページで語られています。これは慶太翁の理想と重ねることが出来るのではないのでしょうか。自分の持ち場持ち場で慶太翁が教えてくれることを実践し努力すれば世界は変わっていくと思います。

青木村の皆さんには、若者に楽に金儲けすることなど教えずに苦勞して大きな仕事をする価値を教えてほしいと思います。歴史的に青木村はけっして恵まれた村ではありませんでした。楽に生きられなかった土地に生きた先人たちが必死に努力されたことで他に負けない青木村が今ある、それを忘れないでほしいです。

この本を書きながら人間にとっての本当の幸せって何なんだろう、それをずっと考え続けました。「慶太伝」に作家遠藤周作の言葉を書きました。幸せには二つの幸せがある。「生活の幸せ」と「人生の幸せ」である。「生活の幸せ」とは、人に何かを与えてもらうこと、言い換えれば己の欲望を満たすことにあり、「人生の幸せ」とは人に自分の大切な何かを差し出すことである、と。

五島慶太が追い求めたもの③ 五島慶太のミッション

彼の使命（ミッション）は、「生きてきたことの証しを立てること」だったのではないかと私は思っています。彼が好きだったことは、自分の人生をどれだけ価値のあるものにするか、にあったのだらうと思います。あれだけの大きなことを成し遂げながら、青木村に

対しても松本中学や青木小学校の恩師に対しても、感謝の気持ちをなぜ持ち続けたのか、を考えるとそこにたどり着きます。青木村の公民館を作ってくれたことも然りです。上京する時に、五島家の位牌を作り持って行ったようだ、と小林家のご子孫からお聞きしました。

ひとつの目的にこだわらず、その時々、困難に立ち向かいそれに打ち勝つことに価値を置き、闘い続ける。それを支えてくれた人たちへの感謝があったのだと思います。

今の時代、「生き方」、「感謝」、そうしたことを語り合うことはとても少ないです。五島慶太のメッセージの現代的価値は自分の生き方を大事にして、自分を支えてくれるものに感謝し、自分の使命を全うすること、ここに尽きるように思います。

人生で大切なことは、自分の夢を思い描いてそれを成し遂げることではないように私は思います。夢を持つなと言っているのではありません。自分が出来る好きなことを見つけ、自分の使命を全うすることなのだと思います。

そのために、自分の誠実さを磨き、誰かが求めてくれた時にそれに応えられるように準備をすることが大事なのだと私は思います。五島慶太の言った熱と誠の真意はここにあるのではないのでしょうか。

明治の教育者内村鑑三はその著書において、なにびとにも残せる後世への最大の遺物は「自分の勇ましい高尚なる生涯を残すことだ」と言いました。

今回北村村長がここまで思いを込めて伝えたい五島慶太とは何をしたかではなく、立派に生きたということを伝えたかったのではないかと私は受け止めています。

人が大成する秘訣

五島慶太の親しい友人に「電力王」と呼ばれた松永安左エ門という人がいました。彼が慶太翁に実業家として大成するための三つの秘訣を教えてくださいました。

「その一つは長い浪人生活だ。その第二は長い闘病生活だ。その第三は長い投獄生活だよ。この三つのいずれかを体験してこそ、本当の実業家となるんだよ」

慶太翁が今の一橋大学、当時の高等商業学校を落ちた時、打ちひしがれて皇居のお濠沿いをさまよい歩きました。やがて九段の池のほとりに辿りつきベンチに腰を掛け、将来どうしようかと苦悶し夜遅くまで一日考えたと他の伝記にありました。

その気持ちはわかる人にはわかるのではないのでしょうか。

昨日、日本山岳会の講演会で田部井淳子さんの夫政伸さんのお話を伺ったのですが、高校時代結核から骨盤カリエスを患い、それが後の人生に大きな影響を与えたと言われました。

田部井淳子さんも最後はがんで亡くなられたのですが、闘病しながら山に登り、二人で「病気になっても病人にならない」と励まし合っていたと伺いました。

私たちは生きていく中で目的に向かって努力をしてもそれが叶わないことはいくらでもあります。努力すればうまくいくなんで甘いものではない。だから努力しなくていいのでは

なく、そう突き放した思いを持って努力することが大事だと思います。

つまづくことは辛いことですが、つまづいて学ぶこともたくさんあります。人生の成長において、挫折することはとても大事なのです。

ある会社の社長は採用担当にこう言いました。「どんな優秀な人間でも、次の3つのうち一つも当てはまらなければ採用するな、ひとつは浪人、もうひとつは中退、もうひとつは何だと思いませんか？最後は大失恋だ」と。こういう挫折を体験しないとうちの会社ではやっていけない、ストレスに負けてしまうとされたそうです。

でも、何度挫折しても全然伸びない人もたくさん見てきました。苦勞が身にならないのです。挫折しても被害者意識と恨み節ばかり。大事なのは、挫折をした後にどうやって自分を立て直すか、どう乗り越えたかです。そこに成長があります。挫折を自分の問題と受け止めそれにしっかり向き合わないと人間は大きくなれません。

挫折を乗り越え生かされていることを知った人間は、ある一つの言葉に出逢います。「感謝」です。感謝を学んだ人間が次にとる行動というのは、自分を生かしてくれた人のために、というより、誰かのために自分も生きたい、自分を生かしてくれたあの人のように生きたい、そう思うようになります。そして自分のためではなく、無人称の誰かのために生きたいと思うようになるのだと思います。慶太翁の「自己犠牲」はそうした思いを内包しているように見えます。

私も仕事柄いろんな人から学び、今では、自分が苦しい時に自分にこう語りかけます。

「どんな時も笑顔と努力を忘れるな。笑顔を忘れると人が去ってゆく、努力を忘れると運が去ってゆく。泣きたくなったら笑いながら泣け、努力が嫌になったら、努力しながら休め」と。

人間関係は求めるのではなく求められてできる。

幸運は準備された心に宿る（パスツール） ノーベル賞の北川先生が引用した。

世の中、人間関係がすべて、という人がいますが私はそうは思いません。自分を磨いてこそ人間関係が生きてくるのだと思います。人とうまくやることを考えるよりも人が応援したくなるように自分を磨くのが大事だと思います。そのためには嫌われる勇気が必要です。一人になっても自分の言うべきことは言う。自分を主張すれば友だちは減ります。でもその一方で、そこで本当に大切な友だちが必ず現れます。良き友とはこちらから探すのではなく、向こうから現れるように思います。だから誰からも好かれなくてもいい、と思ったときに逆に本当の親友に恵まれるのだと思います。

私も組織を離れていますが、多くの友達是要らない、一握りの親友だけでいい、と思っています。良き友にめぐらあえた人は幸せです。

私の友人のひとりに上田出身の男がいます。ヨコちゃんという素晴らしい男ですが、続編の執筆を引き受けるかどうか考えていると彼に言いました。これを引き受けたら青木村の平均年収の半分以下で1年間生活しなければならない、そう言ったら、こんなことを言っ

てくれました。

「根本先生は否定なさるかもしれませんが、悩みながらも真に活力ある職場や社会の未来を見据え、使命に立ち向かう根本先生の姿は、どこか五島慶太翁の姿と重なって見えます。これまでの根本先生の執筆への思いや孤独の中での五島慶太翁との対話など経緯を聞いたことによる思い違いもあるかもしれないと思いつつも、そう感じてなりません。私にできることは、微力なものしかありませんが、根本先生の決断を応援しています」人は時に人で躓きますが、同時に、力を与えてもらうのは人でしかない。彼の言葉をかみしめてそう思いました。

人生は出会いで決まる

本にも書きましたが、森信三はこんな味わい深い言葉を残しています。「人間は一生のうちに逢うべき人には必ず逢える。しかも一瞬早すぎず、一瞬遅すぎない時に」。マルチン・ブーバーという哲学者は「人生は出会いで決まる」と言いました。その次にさらに言葉を続けます。「最大の出会いは自分との出会いである」と。

私の人生にも大きな影響を与えてくれた出会いがいくつかあります。皆さんがご存じかもしれない人で言うとそのおひとは聖路加国際病院の日野原重明先生です。「生活習慣病」「人間ドック」という言葉を作り、サリン事件の時に陣頭指揮した先生です。ご自宅でお会いした時に率直に申し上げました。

「今日先生にお会いするのを苦痛に思っていました。私は先生のように明るくありません。暗いんです」と言ったら先生は笑いながら「私も百歳までは暗かった。百歳越えたら明るくなれるから百歳を目指しなさい。私は二百歳を目指します」と。お会いした翌年104歳で亡くられました。この方は苦労して来られたんだな、と思いました。

もうひとり大事な恩師が「人間だもの」の著者相田みつを先生です。当時私は職場で干されていました。先生を説得して講演に呼ぶ、それが私の役目で先生のご自宅に伺いました。先生は私のすべてを読んでいました。「わたしを何が何でも連れて行かないとならないんだろう。一度講演を受けると寿命が縮むのがわかるんです。でもあんた本気で頼んできたよな、講演は引き受けるよ」と言われました。そして帰るときに一言「根本さん、あんた必ずものになる」と言ってくださいました。今になれば、うそつき、と言いたいくらいですが、その講演の翌年に亡くられたことを最近になって知りました。

私は運命を信じますし、出会いも運命です。だからこそ、いくら努力してもダメな時はだめ、と思っています。もちろん努力しなくていいということではありません。努力しただけでうまくいくと思うな、ということです。

今回の執筆においても、さまざまな出会いがあり、その端緒を開いたのは東急の但馬英俊さんでした。当時信濃毎日新聞に時々記事を書いていて「長野出身で郷里の英雄五島慶太に憧れて東急に入社した人を書きたい」ということで但馬さんをご紹介いただきました。

これが慶太伝執筆の契機となりました。お会いして、こんなに誠実で人柄が良い人がいるんだと感心したのですが、いきなり但馬さんを取り上げたら、会社で何か言われご迷惑をおかけすると思いました。そこでワンクッション置いて連載「五島慶太 青木村と東急」を書きました。実は信濃毎日さんと綿密に計画を立て、あちらは日曜の夜に関係者で打ち合わせをしてくれ、これを命日に合わせて出すということにしてくれました。その記事を読まれた北村村長が私に執筆を依頼されてきました。

あとで聞いた話では「慶太伝」の構想はあったそうですが、誰に書いてもらうか考えていたそうです。そこで私が「飛んで火にいる夏の虫」になってそれから1年間大変な苦勞をしたということです。

それから忘れられないのが、はじめて慶太翁の生家に行こうとした時に道がわからず、道を尋ねたのがたまたま木子里の金井さんの奥さま、聞けば東急の野本会長も木子里にいられていたとか。その木子里は当時ご主人の都合で休業中、まさか今年4月の五島慶太の日に、金井さんのご主人のおそばを食べられるとは思っていませんでした。

また沓掛温泉の千楽の女将沓掛千枝子さん、懇意にさせていただき行くたびにお土産に漬物をいただきました。そこで当時の長野県職労湯本委員長（今の自治労委員長）が私を慰勞に来られた時に、たまたまお会いしたのが坂井さんご夫妻。奥様は五島慶太を敬愛する東京の実業家伴紀子さん、ご主人は私が入ったばかりの日本山岳会の元副会長坂井広志さん、びっくりでした。せっかく山岳会に入ったのにこの執筆があつて山は断念していましたから、伴さんとの出会いが自分のおぼろげだった使命感を明確にしてくださいました。軸をぶらさずこのまま生きろ、と。

幾度も制作の窮地を救った慶太マジック

そして執筆中にここでは言えないような困難な状況に陥った時に私たちがあとで名づけた「慶太マジック」に何度も窮地を救われました。

「慶太伝」の推薦文に村長の他に、東急野本会長、長野県阿部知事、信毎畑谷専務、この3人が並んだこともそうです。ふつうあり得ません。中立である新聞社のトップが本の推薦文を書くのは前例がないそうです。当時、信毎さんが阿部知事に厳しいことを新聞に書いていたのに、五島慶太だから一つにまとまってくれたのだと思います。

思えば、慶太翁も人に恵まれ、若い時に国を動かす有力者と出会ったことも彼の世界観を広めたように思います。自分の野心だけでは動きませんでした。常に大義を持っていたし、それゆえに他人に何と言われようがびくとしなかった。ところが彼はそれを逆手に取られ幾度も失敗している。東京高速鉄道を手放した時にも個人的な野心ではなく、公を取らざるを得ず、泣く泣くそれを手放すことになった。彼自身も運命に翻弄されたように思います。

五島慶太はあれだけ企業買収をしながら、最後はその株を会社に譲り渡している。自分の会社の株を社員が持てば、それが励みになって一生懸命働くだろう、そう思って株を社員

に分け与えたのです。五島慶太は自分の財産を増やそうとしていない。それが他の実業家とのとの大きな違いです。自分の財産を増やすよりも、東京を日本をより良くしたい、そういう志を持っていた。

多くの人々の祈りに支えられ、「慶太伝」は生まれた

慶太伝は、青木村の人たちのためだけに書いたのではない、その意味をわかっていただきたい。もし青木村のためにやったのであれば、隣の町や村の人たちはどう思うだろうか、青木村の自己満足に気持ちがしらけてしまうと思います。この執筆にはほかの地域の人たちの思いが込められています。

特に松本の人たちとの出会いも私を後押ししました。松本深志高校同窓会藤原事務局長が起点を開いてくださりました。お父様が東急に勤められていた上條泰子・菊入三樹夫さんご夫妻、奥様は未来創造館の宮沢館長と東京で同じ社宅に住んだこともあるそうです。そしてあの慶太翁が下宿していた上條家のご子孫です。そして感謝がしようがないほど尽力してくれた丸山哲治さん、手術を控えた病床の中で、国会図書館にアクセスしてくださいました。そこで次々と新事実を明らかにしてくれました。丸山さんからは「本当の五島慶太を世に知らしめてください」とメールをいただきました。あとで手術が無事終わりました、と言われたときは何のことかわからず、あとで事情を呑み込んだ時は、え～！っと驚きました。

そしてもうひとり胸に刻みたい方がいます。一昨日急逝された松本深志高校同窓会長で安曇野市長の太田寛（ゆたか）さんです。その丸山さんが8日に太田市長にお会いした時に慶太伝を差し上げたら

「ああこの本、読みたかったんだよ！　すぐ読ませていただくよ！」と仰っていただき、喜んでご本をお受取りいただいたのです。」と言っていたそうです。ぜひ感想をお聞きしたかったです。太田市長にも謹んでご冥福をお祈りしたいと思います。

それに私も昔から知っている現在ご活躍中の大町市の打越市長も、慶太伝のことを好意的に受け止めてくださっています。

五島慶太を青木村が独りじめにして囲い込んではいけないのです。もうそこまで来ています。青木村の人びとのためではなく、青木村の人びととともに五島慶太を伝えていくことが私の使命だと思っています。

五島慶太未来創造館はこの秋来訪者が3万人を突破したとお聞きしました。来館者は五島慶太をもっと知れる本が読みたい、そう言われていてその思いがこの慶太伝に結実しました。そうやって五島慶太を世の中に知らしめていくという使命感が大事なのだと思います。

義民太鼓を一生懸命継承している子どもたちも、青木村が義民の村なのだということを伝えるためにやっているものであり、それはただの太鼓パフォーマンスとは次元の違う強さを持つのです。

今日を強盗慶太の汚名を晴らす記念の日とさせていただきます。

ここに集った方々は皆さん同意して下さったと思うので小林家の皆さんもご安心ください。そして改めて五島慶太の末裔であることを誇りに思ってください。

小林正博さん規子さんご夫妻、ちょっと立ち上がってください。皆さんねぎらいの拍手をお願いします。

そして何より大事なのは、五島慶太が何をしたかではなく、どう生きたかを知り、偉業よりも偉大な生き方を未来を生きる人に伝えることだと思います。それを伝えようとした北村村長の情熱にあらためて拍手をお願いいたします。

私自身、今、社会の中で理不尽に苦しみ逆境に生きる人に捧げる思いでこの「慶太伝」を書きました。「皆さんも大変かもしれないが、努力で逆境を覆してたくましく生きる人間がいた」そのことを伝えたくて書きました。

青木村の皆さんも五島慶太を輩出したこの青木村が育てたことを誇りに思ってもらいたい。青木村が青木村であり続けるなら第二の五島慶太が生まれるかもしれません。

以上で私のお話を終わらせていただきます。

根本